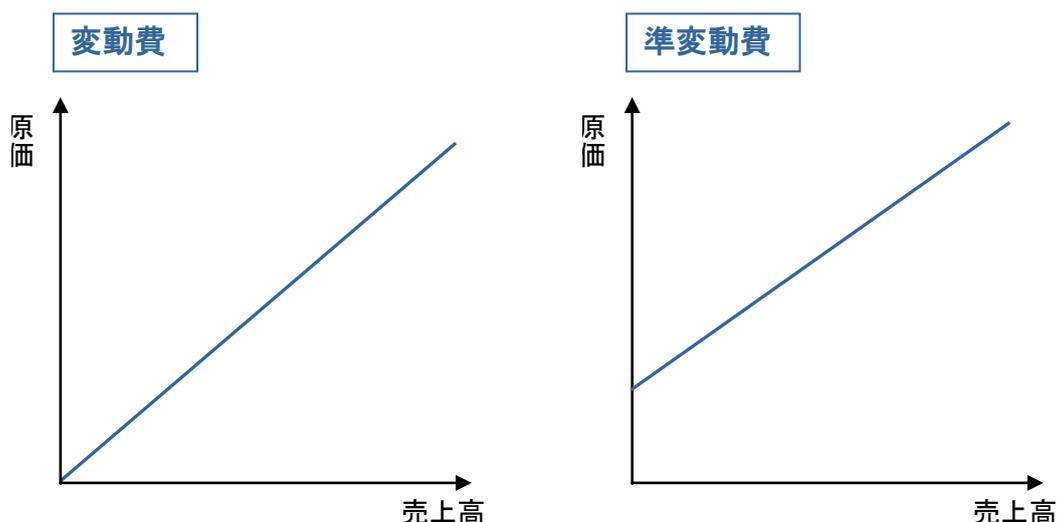


ロ) 準変動費とは

変動費の大多数は売上に比例して増減する比例費ですが、中には売上高がゼロであっても、ある一定の費用が発生する性格のものがあります。例えば電力料や水道料で、消費量に応じて従量料金が加算されますが、使用していなくても基本料金が発生します。これを「準変動費」とよび、先の準固定費と準変動費はその性質が似ているため、費用判断の視点に応じてどちらかに分類されます。



(2)5つの費用分解手法

①演繹的な方法と帰納的な方法に分かれる費用分解手法

費用の分解方法を大きく分けると、次の図のように演繹的な方法と帰納的な方法に分かれ、さらに帰納的な方法は4種類に分けることができます。ここでは手法の1つとして「演繹的な方法」であるIE法も紹介しますが、実際に用いられる手法は「帰納的な方法」に分類される手法になります。

■ 固変分解手法の種類



② 個変分解手法

イ) I E 法

I E 法 (Industrial Engineering Method) とは、動作研究や時間研究等によって費用の関数を見出す方法になります。これは科学的、論理的アプローチとなり、実際には費用の関数を見出すのは容易なことではありません。したがって、あまり現実的な方法であるとは言えません。

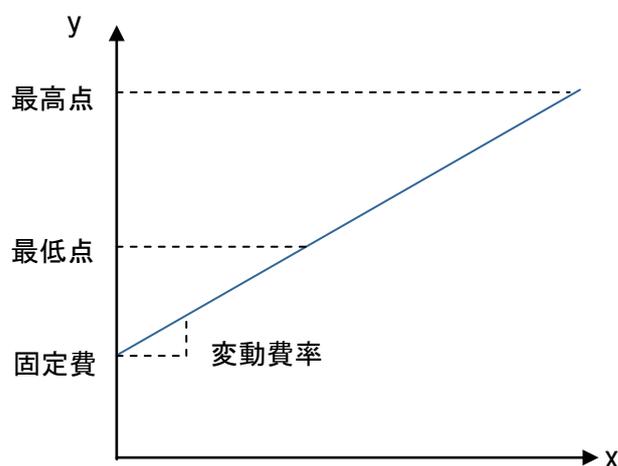
ロ) 費用別精査法

勘定科目毎に固定費か変動費かを定める方法です。比較的容易であるため、実務上もっとも多用されている方法であるといえます。しかし、変動費と固定費の判断が主観的になりやすく、また変動費か固定費か明確に分類しかねるものも無理にどちらかに分類しなければならないため、多少ですが正確性に欠ける面があります。

ハ) 高低点法

過去の実績データのうち、業務量が最高の点と最低の点とを結び、その2点を結ぶ直線を総コスト線とみなす方法になります。総コスト線が y 軸と交わる切片を固定費、総コスト線の傾きを変動比率とするのです。簡単な方法ですが、この作業で費用の全てを推定することは難しいと考えられます。

■ 高低点法を示す図表



ニ) スキャッター・チャート法・最小自乗法

過去の実績データをグラフにし、目測で近似直線を決定する方法です、近似直線の y 切片が固定費、傾きが変動比率になるのは高低点法と同様です。しかし、目分量で適当に直線を引くので、直線が1種類に決まらず、客観性に欠けます。そして、この近似直線を数学的に求める方法が最小自乗法です。